

平成21年12月21日発行

北海道国際理解教育研究協議会

会長 白石 邦彦
事務局長 中村 淳

会報 第74号

第30回北海道国際理解教育研究大会 札幌大会を終えて

北海道国際理解教育研究大会札幌大会

実行委員長 白石 邦彦
(札幌市立清田小学校長)

10月8日・9日の2日間にわたって開催された北海道国際理解教育研究大会札幌大会は、全道の会員の先生方をお迎えし、無事終了することができました。会員の皆様のご協力に感謝申し上げます。

今回の札幌大会においては、幼稚園・小学校・中学校・高等学校の4校種の授業公開を実施することができました。また、それらの園・学校を循環するバスを出したことにより、参加した先生方がすべての授業を見ることができました。参加した先生からも、新たな試みとして、すべての校種の授業を見ることができたことは大変参考になったという声が寄せられています。

また、目白大学の多田孝志先生のご講演は、「未来に向かって行動する子を求めて」という演題で、フロアーの先生たちを巻き込むエネルギッシュな内容で、あっという間に時間が過ぎていきました。大会終了後に多田先生から、研究大会の主張がすばらしかったというお褒めの言葉をいただき、北海道の研究が着実に成果を上げていることを実感しました。

さらに、今回私たち教師自身も地域へ発信しようという趣旨で開催した、「教科書にのっていないアフリカ」の体験型イベントもたくさんの市民が来場し、盛会のうちに終了しました。陰で支えてくれた多数のボランティアの方たちの協力に改めて感謝したいと思います。

数々の成果のあった大会でしたが、30周年を迎えた今、今後これからの地球を見据え研究を深めていかなければなりません。これからの10年を見通した時、国際理解教育として何を大切にしていかなければならないのでしょうか。

現在、人とのつながり、地球上のすべてのものとのつながりが希薄化してきています。それらと上手につながりながらつきあっていく力、地球上の課題を地球人として地球の未来を考え、よりよく解決していく力が、今、求められています。それらの力をこれからの未来を生きる子どもたちに身につけさせたいと考えています。

1月7日には、平成22年度派遣教員研修会及び帰国教員報告会があります。全道各地の会員が参集し、お互い研修を深め合いたいと考えていますのでよろしくお願いいたします。

公開授業と授業別分科会の記録

【幼稚園部会 公開授業】

単元名 「イメージ造形」

◇園児	清田幼稚園 年長組		
◇授業者	マッシュ ウェブ	担任	鈴木 朋子
◇運営・司会者	札幌市立南月寒小学校	教諭	中池 徳幸
◇記録者	札幌市立拓北小学校	教諭	鷹 礼香

●授業記録

3つのグループに分かれ、マッシュさんの英語での指示に従いながら、園児たちが白い大きなキャンバスに絵を描いていった。グループごとに色と使う道具が違い、足と手を使うグループ、筆を使うグループ、ローラー、網、葉などを使うグループに分かれていた。マッシュさんが「Good!」「Oh! No!」「Draw」「Circle」「Feet」「Don't」「Thank you」など全て英語で園児に話しかけながら活動していた。キャンバスが色で埋まると、グループの色と使う道具を「Change」という言葉とともに交換し、園児たちは色を重ねることや新たな技法で描くことの楽しさを全身で表現していた。授業の最後には「ありがとうございました」「Thank you」と大きな声で挨拶をする園児の姿があった。



●分科会記録

<授業者マッシュさんと援助の先生方より>

- ・園児と今日のような活動をしたら、どうなるのだろうか、反応が静かになるのだろうかと予想していたが反応が良かった。
- ・1時間ほど本時の前に活動を行ったことが流れを作るのに有効であった。積極的な動きにつながったと思う。
- ・やりとりを通して言葉を学んでいくことが大事。状況のなかで、言葉がどんな意味をもっているか自然に理解することができ、語彙が増えていく。

<清田幼稚園園長先生より>

- ・子どもたちがマッシュさんの言っていることを真剣に理解しようとしていた。一人も落ちこぼれがなく、動き回っていた。行動できたことが何より成功であるし、国際理解で大事なことである。色を全て塗ってしまうとだめなのではないかと思ったが、色を重ねることの楽しさを感じることができていた。パズルになるという後からの楽しみもある。

<参観した先生方より>

- ・子どもたちが活動を素直に楽しんでいた。
- ・登園時からマッシュさんとの活動を楽しみにしている子がいた。
- ・もっとやってみいたいという思いが全身を使って伝わってきた。
- ・文字ではなく、今回はアートを通した相互理解という場の設定が面白かった。
- ・Stand Up. Stop. など遊びを通してしっかり理解できていた。
- ・幼稚園の先生方の動きが素晴らしかった。マッシュさんの言葉をすぐに訳さずに、園児たちが考えて行動する時間を作っていた。「待つ」ということが子どもの育ちにつながる。



【小学校部会 公開授業・授業別分科会 国際理解教育】

小学4年 総合的な学習の時間

単元名 「魅力いっぱい清田」

◇児童	札幌市立清田小学校	4年1・2組	男子30名	女子22名	計52名
◇授業者	札幌市立清田小学校	教諭	佐藤泰志	古永玲子	
◇運営・司会者	札幌市立円山小学校	教諭	菅野英人		
◇助言者	目白大学 人間学部	教授	多田孝志		
	北海道教育庁学校教育局				
	義務教育課義務教育指導グループ	指導主事	軽部恭子		
◇記録者	札幌市立山鼻南小学校	教諭	鶴田正道		

【授業の様子】

以下の点で子どもたちの「行動力」がしっかりとみることができた授業実践であった。

① 発表力

ポスターセッションという形式をとりながらも、子供たちはそれぞれ落ち着いて清田について調べたことを発表していた。方法も子どもたちがそれぞれ工夫しており、紙芝居形式やクイズを織り込んだものなど、発表者それぞれに自分の言葉で伝える、個性ある発信力があった。まさに地に足のついた授業展開であった。

② 質問力

聞き手もただ聞きっぱなしではなかった。これは①にも通じるところであるが、「伝え合い」の積み重ねであると感じた。今回の研究以前から清田小学校では自分の思いを伝え、受け止め、思いを比較し、交流することを大切にしていた。3年生では1対1の伝え合いの中で難しい言葉は簡単にし、伝えたいという思いを大切にしてきた。相手を意識した発表力とそれにこたえる質問力が育っていた。

③ 人とのかかわり

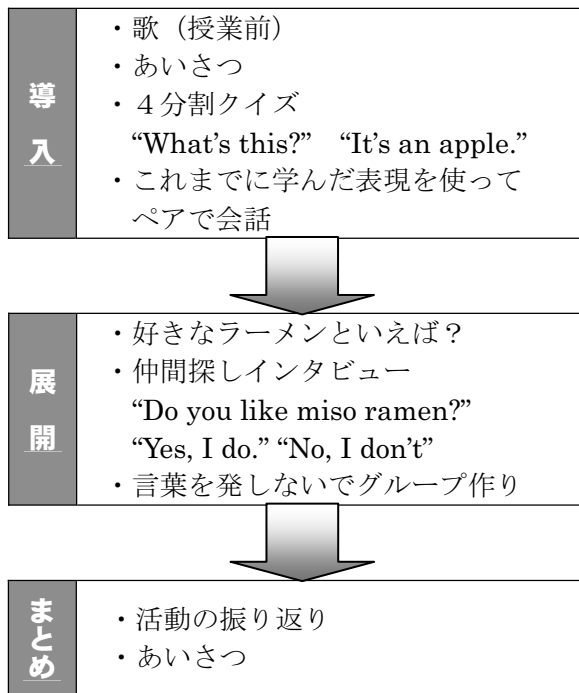
今回の探究活動においては人とのかかわりが大切でありそれを実践し、今回の授業実践へと結びつけていた。人とかかわることによって自分の情報を確かなものにしていった。その結果として子どもたちが自然と、清田の魅力と「人」が結びついていくという授業のまとめに結びついていった。過去の人を調べたり、今の清田を守っている人から実際に話を聞いたりする中で自分たちもその清田に住む一人であることを意識し、努力を受け継ぐ。またもっと清田をこうしていきたいという発信力につながっていくと考えられる。

【分科会の様子】

自分の思いを発信するだけでなく、その発信によく反応する子どもたちの姿に驚きの意見が多数出た。3年生から6年生までの総合的な学習の時間の、系統だった指導形態にも興味を示され、他の学年での取り組みにも質問が出た。助言者の軽部先生からは、国際理解教育の目標を達成するためには、今日のような授業をフィルターにして実践していく必要があることや、ポスターセッションでの伝え合っていた子どもたちのがんばりをもう一歩踏み込んでいく方法論が語られた。また、多田先生からは「主体的行動力」の大切さをしめされ、21世紀型のコミュニケーション能力について語られ、視点の多様性、他者意識の重要性などが語られた。

地に足のついた授業を展開し、子どもたちが自分の身の回りの地域のよさに気付き、交流し合いさらに深めあうことがまず国際理解の出発点であることを改めて痛感させられた。

1. 授業の展開



2. 授業での様子と話合いの記録

観点① 受容的な態度

お互いに好きなラーメンをたずね合う活動を通して、「自分の思いを大切にそれを表現できるように、そして自分とは違う相手のことも認める態度を育てること」が表れた授業となった。



異性同士かかわれないような実態があったということから、“Boy and Boy, Girl and Girl”と指示を出すなど、より多くの友達とかかわれるよう工夫した点も、相互理解につながっていた。最後の振り返りでは、子どもたちから「～君はみそラーメンだと思っていたのに、とんこつラーメンが好きだった。」という声が聞かれるなど、友達のことについて新たな気づきが生まれたことを感じさせる姿が見られた。

また、授業の導入の場面では、これまでに学習した表現（あいさつ、“How are you?” “What is this?” “Do you have～?” など）を使って会話をつなげる姿が見られた。これまでの学習の積み重ねが生かされるとともに、抵抗感なく外国語に親しむ子どもたちの様子がうかがわれた。

観点② 文化理解

今回ラーメンという素材を取り上げた理由は2つある。1つは子どもたちが大好きで、誰もが好みを正直にいえる点、2つ目は外国人から見て代表的な日本食であるという点である。本時ではラーメンを文化理解として大きく取り上げた展開とはしなかったが、「単元全体を通して観点4つを網羅しながら単元構成していけば目標が達成されるといってよいのではないか。必ずしも毎時間に4観点が含まれるわけではない。」と話合いの中で意見が出ていた。

観点③ 思考力

インタビュー後に、言葉を発しないで好きなラーメンの種類同士でグループ作りを行った。非言語によるコミュニケーションを体験させることで、様々な伝え方（手を振る、×を作るなど）を考え出して行動する姿が見られた。また、グループ作りがなかなかうまくいかなかったところから「どうしたらしっかり集まれる？」とたずね、「言語を使えばより自分の考えや思いを表現できる」ということを子どもたちに実感させていた。

話合いの中でも、「豊かな表情や五感を活用した表現が大切である。小学生の段階としては、どんな手立てであっても伝えようとする姿勢を育てたい」との意見が出されていた。

観点④ コミュニケーションスキル

「明るく、はっきりした声」「相手の目を見て」「テンポよく」という3つの視点を示したり、インタビューの前に「話している間は探検バッグを持たない」という約束を示したり、相手とコミュニケーションを図る際の基本的な姿勢を丁寧に扱っていた。

また、ラーメンを取り上げたインタビュー活動により、「言わされる」活動ではなく、「言いたい」「聞きたい」という子どもたちの思いが生かされる活動となり、“Do you like～?”や“I like～.”などの表現に十分に親しませることができた。



【小学校部会 公開授業 外国語活動】

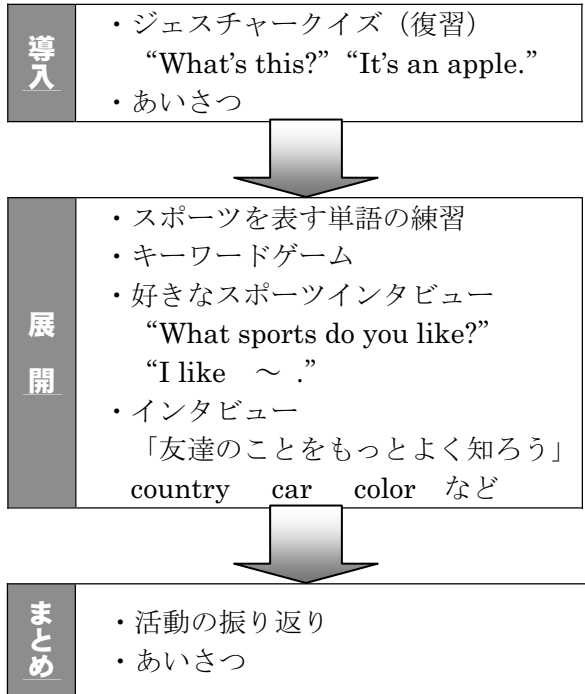
小学6年 外国語活動

単元名「私の好きなもの、好きなこと～“like”を使って～」

◇児童 札幌市立清田小学校
◇授業者 札幌市立清田小学校

6年1組 男子16名 女子15名 計31名
教諭 島野 博光

1. 授業の展開



2. 授業での様子と話合いの記録

観点① 受容的な態度
観点③ 思考力

「自分を表現し、他者を今まで以上に尊重できる児童に育ててほしい」という島野先生の思いが表れる授業展開だった。

インタビュー活動では、「男子2人女子2人とするんだよ」という先生の指示のもと、自由に歩きまわって“**What sports do you like?**” “**I like ~.**”を使って会話を楽しむ姿が見られた。4月には固定の友達同士でしかペアを作ろうとしなかった子どもたちも、意図的にペアの相手を指定することで、より多くの友達とかかわり、相手のことを深く理解しようとする気持ちにつながっていた。

また、「相手のことに深く気付いたり、理解したりしてほしい」という願いから、一対一でのコミュニケーションを重視した展開となっていた。「子どもたちは無意識のうちに互いにコミュニケーションを図ろうとする姿が見られるようになり、外国語活動が学級経営にも役立っている」と島野先生は話していた。話合いの中でも、「高学年はコミュニケーション不足で理解不足になりがちだが、子どもたち相互の理解が図られ、学級経営が良好に保たれていることが感じられた」と意見が出されていた。

また、インタビュー活動では実際にインタビューする前に相手の好きなものを予想してから尋ねることで活動に対する目的意識を生み出していた。

授業の中心となる「友達のことをもっとよく知ろう」では「実際に好きなものを聞きたい人に聞いてみよう」という先生の発問に「**country, car., color**などを聞いてみたい」とこれまで以上に熱心なやり取りが見られた。「思わず、“聞いてみよう”“話したい”と外国語を通してお互いに伝え合いたいという姿が見られたのではないかと話合いの中でも意見が出されていた。

観点② 文化理解

「授業のどこに国際理解の観点が見られるのか?」「一般の外国語活動の授業とはどう違うのか?」「地球上には靴を履いてサッカーできない子どもたちがいることや、おなかいっぱい食べられない子どもたちがいるといった要素を取り入れてみたらよいのではないかと」の意見が出されていた。

また、本部会が提案した4つの観点については、「単元全体を通して評価基準の観点4つを網羅しながら単元構成していけば目標が達成されるといいのではないかと。必ずしも毎時間に4観点が含まれるわけではない。」と話合いの中で意見が出ていた。

観点④ コミュニケーションスキル

新しい単語を習得させるため、キーワードゲームを行ったり、抵抗感なく表現が習得されるよう「教師⇄児童」「児童⇄児童」と活動に変化をつけて繰り返し練習させ

たりしていた。子どもたちの英語を使って活発に会話をする姿が見られ、十分に表現に親しむ様子がうかがわれた。

また、「必ずしも正しい発音でなくても担当が積極的に英語を使い、子どもたちを英語でほめているところがよかった」と教師のかかわりも、子どもたちの外国語に対する意識を育てることに役立っていたことが話合いでも意見が出されていた。



【小学校部会 授業別分科会 外国語活動】

◇運営・司会者	札幌市立藻岩南小学校	教諭	岩村鋭介
◇助言者	北海道教育大学 教育学部	教授	萬谷隆一
	札幌市教育委員会	指導主事	大道弘孝
◇記録者	札幌市立豊平小学校	教諭	高木千晴

指導主事 大道弘孝先生より

○札幌市では移行期間ということで、各学年 10 時間以上外国語活動に取り組んでいる。次年度は、各学年 20 時間以上実施し、平成 23 年度の完全実施をむかえる。今年度、札幌市のほとんどの学校で平均 23 時間以上実施されており、前学校の 4 割がすでに 35 時間実施しているという状況である。来年度は 30 時間ぐらいが平均になる見通し。

○英語ノートにかかわっては、5 年生は全学校が「英語ノート 1」を使用しているが、6 年生に関しては、3 分の 1 が「英語ノート 1」、3 分の 2 が「英語ノート 2」を使用している。

○外国語活動の課題は、限られた表現の中で、コミュニケーションの質をいかに高めるかということ。

○外国語活動の授業には 3 段階ある。

①教師が新しい英語表現を提示する場面。(しっかり聞かせることが大切。)

②活動に必要なことを教え、練習させる場面。

③コミュニケーションを図る場面。

ここでのポイントは、

- ・子どもたちが自分の思いで聞きたいことを選択できる。
- ・話す手段としての英語であることを忘れない。
- ・活動の時間を限る。



北海道教育大学 萬谷隆一先生より

○「言われる」ではなく、「言いたい」という授業だった。展開の工夫がよくなされていた。

○国際理解の中での外国語活動をどうとらえるか？

- ・カリキュラムの出口に外国人との交流を取り入れたり、トピックとしてグローバル教育を取り入れたりすることもできる。
- ・「国と国との間の理解」、「異文化をまたぐ理解」というとらえではなく、「個人と個人がどれだけ豊かなコミュニケーションを図れるか」という“interpersonal (インターパーソナル)”として考えてはどうか。
- ・“interpersonal (インターパーソナル)”とは、個人を理解することで、これは全てにおいてベースとなること。

○中学・高校の先生とは違って、「外国語活動は小学校では学級作りによい」というコメントが多く聞かれる。小学校外国語活動は小学校教育を横で見、授業を作っていくことが必要。「どうしてこの子たちに英語を教えるのか」全人的教育の意味を考えてほしい

小学校外国語活動の成果と課題

○「コミュニケーションスキル」に偏った授業ではなく、「受容的な態度」の観点を大切にして授業を構成することで、子どもたちの「お互いに伝え合いたい、お互いを認め合おう」という気持ち生まれ、豊かなコミュニケーションを図ることができるということが実践された。また、単元を通して評価基準の観点 4 つを網羅していけば目標が達成できることが確認された。

▲国際理解教育研究会として、どのように国際理解をとらえ、どのように授業の中に国際理解の要素を取り入れていくか検討していかななくてはならない。

【中学校部会 公開授業・授業別分科会】

◇運営・司会者	札幌市立石山中学校	教諭	西山 昇
◇助言者	札幌市立真栄中学校 北海道教育庁石狩教育局	校長	林 英雄
	生涯学習課義務教育指導班	指導主事	畠山治夫
◇記録者	札幌市立伏見中学校	教諭	藤田憲一

【公開授業】

- 1 授業者 貞広康子先生（北星学園女子中学校）
- 2 生徒 北星学園女子中学校 1年C組28名
- 3 単元名 アフリカ大陸（州）について
- 4 授業の様子

本時は、「水」を通してアフリカの人々の生活環境や衛生状態について知るとともに、自分たちとは全く異なる状況にあるアフリカの子ども達も、実は「遠い」存在ではなく、自分たちとほぼ「同じ」気持ちや夢をもった子どもであることに気付かせるというものでした。

授業は、まず「人にとって必要な水はどれくらいだろう？」という「水」に関するクイズで始まりました。「手洗い・歯磨きに必要な量」「日本人が1日に消費する量」等を貞広先生がペットボトルを使って実際に示すと、生徒たちは自分たちが普段使用している水の多さを改めて実感したようです。日本人は水が手に入らない環境など思いもよらないけれど、世界には水が簡単に手に入らない環境にいる人々が11億人もいるといわれているという説明も十分納得できたようです。

そこで、貞広先生からアフリカの水事情や衛生問題、下痢性疾患で命を落とすといった実情が、実際の写真や資料の読み取り活動を通して提示されました。生徒からは、汚れた水を使っている写真を見て「信じられない」といった声があがったり、資料からアフリカの子どもの死亡率が高いことに注目した意見が多く出されたりと、生活環境や衛生状態の違いに驚きを隠せない様子でした。



続いて、アフリカの子どもと日本（北星）の子どものアンケート結果を比較した資料が配付されました。将来の夢や尊敬する人、好きな教科など、アフリカの子どもたちも日本の子どもたちと同じような夢や考えをもっていることに生徒が気づき、アフリカのことを自分のこととしてとらえていけるようにするための工夫です。

最後は、下痢等による脱水症状の治療として実際に用いられている「経口補水塩」を実際に飲んでみるという体験活動で授業が終了しました。

【授業別分科会の様子】

分科会では、授業についての質疑応答や「身近な生活とのつながりを実感することができる教材づくり」を視点とした討議がなされました。

参観者からは、ペットボトルによるビジュアル化やアクティビティを取り入れた点が効果的であったという意見や、水をテーマとして絞ったことが身近な生活とのつながりという面で良かった、また、ポイントを絞った資料の提示と読み取りの視点が必要では、との意見が出されました。後半はコミュニケーション能力や自己表現力の育成という視点からも活発な意見交流がなされました。

最後に、助言者である札幌市立真栄中学校長の林英雄先生、北海道教育庁石狩教育局生涯学習課義務教育指導班指導主事の畠山治夫先生のお二人よりご助言をいただき、充実した分科会は幕を閉じました。

【高校分科会 公開授業・授業別分科会】

単元名 「国際的人権」

◇生徒	北海道札幌清田高等学校	1年8組		
◇授業者	北海道札幌清田高等学校	教諭	細田孝哉 長沼 齋 加世田一憲	
◇運営・司会者	札幌市立簾舞中学校	教頭	五十嵐直幸	
◇助言者	鹿追町立鹿追小学校	校長	舟越洋二	
	札幌市教育委員会	指導主事	野元 基	
◇記録者	札幌市立円山小学校	教諭	根岸良久	

【授業の様子】

前時の学習「地球のステージ1 & ガザ特別篇」の感想からいくつかの文章を生徒に提示し、感想を交流。

これまでの学習で学んできたように「自分もこのように役立ちたい」という感想が多かった。次に、国際的な仕事の大切さを学ぶが、「日本のことはよいのか、なぜ世界のことを学ぶのか」という発問する。



そこで事例「多数の溺れている人を救う

とき、誰から順に救うのか～大人・子ども・母子・お年寄り・白人・黒人・アラブ人・お金持ちなど」を提示し助ける順番と、その理由をグループで考えた。

グループごとに考えを模造紙に記入。それを黒板に掲示した。生徒は「近い・子ども・力が弱い」ことな

どを理由とし母子やお年寄り、子どもから救うと発表した。そこで「日本のことはよいのか、なぜ世界のことを学ぶのか」再度発問しワークシートに考えを記入。「国際的な立場」「外国の方が深刻」「困っていたら助ける。日本とか世界とかの問題ではない」など自分なりの考え答えをもち考えることができた。



【分科会の様子】

参会者からは、「書くことによって考えが深まる。」「意識が高い子どもだ。」「助けるための、打算的でない基準が説明された。」「人の命だから順番では決められない。少し自分のことになりにくい活動だったのでは。」など、たくさんの感想・意見が出された。授業の再構築という観点から、「自分とは別の世界の出来事として、ただ感情的に「かわいそう」とらえていただけの生徒たちが、本時のような学習（映像・体験・考えること）を経て、今の自分に何ができるのかを考えることができるようになっていくのではないか。そのような力を高校での3年間を通して養い、伸ばしていくことが大切なのではないか。」「前時の感想から、なぜ日本ではなく世界のことを学ぶのかを問うことができたのではないか。」などの意見が出され、討議が深められた。一方的な価値を学ぶのではなく、色々な価値観があってもよいと考えられ、本時の取り組みも生徒たちに多様な価値観が見られた。

【課題別分科会 第一分科会】

◇運営・司会者	函館市立駒場小学校	教諭	柳田美佳子
◇助言者	上川町立上川中学校	校長	藤崎良二
	札幌市教育委員会	指導主事	紺野宏子
◇記録者	札幌市立真駒内小学校	教諭	塩田英樹

〈札幌市立南月寒小学校 中池徳幸先生の発表〉

給食の残量を考える『もりもり食べよう作戦』を全校に展開する中で、地域に住むケニアの方から話を聞き、ケニアの食事情を学んだ実践の報告がありました。この報告から、“食べる”という子どもの生活に関連した取り組みは児童の興味・関心を引くこと、給食室や栄養教諭など他の先生方との連携も大切であることを確認することができました。

〈帯広市立帯広第一中学校 新井英樹先生の発表〉

3年生の『地球と太陽』の中で、メキシコのククルカン神殿における影のでき方から、日周運動について触れ、世界の各都市における太陽の動きを模型を使って比較する学習に取り組みました。この実践の報告では“日本との比較”という視点で取り組むことで、いろいろな教科に“国際理解”というキーワードを取り入れることができることが主張されました。

〈福島町立福島小学校 三浦将大先生の発表〉

2年生で、「人種の違う子どもが喧嘩をしている1枚の写真」からその原因を考えさせる授業の報告がありました。6年生では、グループでルールの違うカードゲーム“ページワン”をさせ、他のグループに行くと戸惑う一異文化体験をさせる一授業の報告がありました。両方の実践から、題材や提示資料を工夫することで、児童の考えを広げ、国際的な視野をもつきっかけをつくることができる、と報告されました。

〈美幌町立美幌小学校 相馬一之先生の発表〉

毎年、美幌町が教育課程に位置付けて、関東地域の日本語学校に通う学生を招いて学校間交流を行っていることの報告がありました。ともすると国際交流はインターネットなどで国旗や人口などを調べるありきたりのことになりがちですが、衣食住や遊びなど、自分たちとの生活スタイルとの違いや共通点に目を向けさせ、お互いのことを質問するなどして直接交流する体験の大切さを感じさせる実践でした。

発表後の話し合いでは、地域に国際理解につながるリソースを探すことで国際理解の実践はできる（人材がいなければ物を通して暮らしが世界とつながっている、影響を受けていることを認識させることが大切である）こと、また、国際理解教育の実践を継続的なものにするために、各学校での人的な配置の確保をしたり、指導計画に残したりしていく必要があるということを再確認する分科会となりました。

【課題別分科会 第2分科会】

「国際交流や国際協力を通じた国際理解教育の実践」

- | | | | |
|---------|---------------|------|------|
| ◇運営・司会者 | 余市町立大川小学校 | 教諭 | 吉田 貢 |
| ◇助言者 | 江別市立上江別小学校 | 校長 | 中村一治 |
| | 北海道教育庁石狩教育局 | | |
| | 生涯学習課 義務教育指導班 | 指導主事 | 新居雅人 |
| ◇記録者 | 札幌市立共栄小学校 | 教諭 | 清水 香 |

発表者：宮浦匡典先生（石狩市立南線小学校）



「ネパールからナマステ」という単元を構成し、4年生を対象にした実践の様子を発表していただきました。自身がネパールで出会った子ども達とネパールが抱える問題を絡めて、教材化されました。特に、毎日行われる計画停電から「停電」の問題、ごみ山の様子やそこで暮らす人々の様子から「ゴミ」の問題をピックアップしています。国語科や社会科とも関連させていました。

JICAからゲストティーチャーを招いたり、自分たちの好きなこととネパールの子どもの好きなことを比べたりすることで、子ども達はネパールの子どもたちを身近に感じながら、ネパールが抱える問題について考え、自分たちが抱えるごみの問題についても考えられるように単元を組んでいました。助言者からは、「考えさせたいテーマを絞ったことが、成果につながった」とご講評いただきました。

発表者：越山真史先生（岩見沢市立北真小学校）



「国境なきこし団～地球のために『問い・思い・願い』を持って、やさしく行動する5年生～」という全70時間の単元を構成し、「キーワードは、人とかかわりから学ぶ『行動化』」とお話しされた通り、絵本作家の真珠まりこさんをはじめ、元ユニセフカンボジア職員や外務省NGO相談員に直接お話を伺う機会をたくさん設けていました。1年間で子どもたちは、「集める」（募金、鍵盤ハーモニカ、リコーダーを集めてカンボジアに）・「伝える」（学校放送、新聞・ラジオ放送で）・「調べる」（パソコン、今まで出会った人に再度インタビュー）・「交流する」（カンボジアの子どもたちとTV会議で、活動の紹介、リングブル集め・ペットボトルのふた集めなどの呼びかけ）の4つの活動や発表を実際に行いました。

できるだけ担任が前に出るのではなく、子どもたち自身で次はどんな人を招きたいか、どんなことに取り組みたいか考えさせたり、ゲストティーチャーから子どもたちに直接アドバイスをもらう形で学習を進めたりするスタイルを続けていくことを心がけていたということです。助言者からは、「一から教材化するのは大変なことだが、子どもにとっては大変魅力がある」とご講評いただきました。

発表者：多治見忠先生（北海道鹿追町立鹿追小学校）



鹿追町は、小中高一貫教育のなかでカナダ学と地球学の2つの研究指定を受け、研究体制を構築している全国でも数少ない地域であり、「カナダ学」としては研究開発校第3期目に指定された学校でもあります。「真の国際人の育成」のために、高校をゴールにしてカリキュラムを構築。「英語で環境問題についてディスカッションできる子ども」という具体的な目標を設定しているということです。

「カナダ学」では、カナダのことを知りながら年間50～60時間程度英語を学習します。オリジナルの教材・教科書作成・教師用指導書・音声CD（ネイティブの発音を）も作成し、教員の研修も積極的に行っています。また、評価のあり方についても検討し、現在では記述式評価・3段階評価へ移行しているそうです。助言者からは「全員が同じ授業ができる工夫が素晴らしい」とご講評いただきました。

【課題別分科会 第3分科会A】

◇運営・司会者	札幌市立豊滝小学校	教頭	綱淵友也
◇助言者	札幌市立中の島小学校 札幌市教育委員会	校長	嶋田 肇
◇記録者	札幌市立藻岩南小学校	指導主事	大道弘孝
		教諭	岩村鋭介

A提言「外国語活動を通じたコミュニケーション能力を育む国際理解教育の実践」

<札幌市立中央小学校 額田さやか先生の発表>

「わかった！伝わった！」と思う外国語活動の実践を目指し、外国語活動の中で「わかった」「伝わった」を大切にしている。

(「6年生野菜サラダを作ろう」で意識した点)

- ①双方向のコミュニケーション
- ②ゲームが楽しいのではなく、コミュニケーションが楽しいゲーム
- ③聞く→言う(まねして言う)→話す(自分の思いを話す)

<まとめ>

「聞く」「言う」「話す」をステップを踏むように場面を作り上げ、児童が抵抗感をもたずに外国語に触れられるように意識して実践している。学習を通して児童が英語に無理なく慣れ親しむことができるようにしていきたい。また、自分が言いたいことを言えるような授業を作っていきたい。



<釧路市立釧路小学校 川崎 民子先生の発表>

英語を使って楽しくコミュニケーションする児童の育成を目指して

「英語活動の体験がない児童や、英語を苦手とする教師でも無理なく楽しく進められる英語活動の構築」「職員全体が英語活動についての理解を深め、誰もが英語活動を進めることができる環境づくり」を目指し、学校で実践した。

(具体的な取り組み)

- ①小学校外国語活動に必要な指導力の向上
- ②児童の意欲を喚起する外国語活動授業展開の工夫
- ③英語環境の充実
- ④英語活動教材の活用

<まとめ>

このような取り組みで、教師の苦手意識が軽減され、児童も積極的に英語学習に取り組むようになった。今後、低中学年の指導計画、評価の在り方を検討していく必要がある。



分科会では、次のような点が話題になった。

- ・低中高学年で外国語を実施する場合の時数の根拠や学習のねらいについて。
- ・児童の「言いたいことを話したい」という思いを大切にしたい授業づくり。
- ・外国語活動の取り組みを学校全体に広める工夫。

助言者の先生からは、次のような助言をいただいた。

- ・3・4年生の総合的な学習の時間で、外国語活動の内容を重複して行うような学習は総合的な学習の時間の目標と合致しないため、あくまでも「問題解決的学習」「探求」といった学習につながるように慎重に取り扱う必要があること。
- ・小中の連携が組織的に行われる必要性。
- ・評価の在り方。
- ・それぞれの学校にあわせた小学校外国語活動の目標をどのように設定するか。
- ・児童の「わかった」「伝わった」はどの教科でも大切にすることであるが、そこに主眼を置いた外国語活動の充実。

【課題別分科会 第3分科会B】
外国語活動を通じたコミュニケーション能力を育む国際理解教育の実践

◇運営・司会者	札幌市立東米里中学校ひまわり分校	教頭	中村邦彦
◇助言者	札幌市立真栄中学校 北海道教育庁学校教育局 義務教育課 義務教育指導グループ	校長	林 英雄
◇記録者	札幌市立もみじ台小学校	指導主事 教諭	軽部恭子 早川崇律

第3分科会Bでは、国際理解教育としての「外国語活動」を進める上での、指導計画、授業作りの在り方について、2つの提言を中心に話し合いました。平成23年度の外国語活動導入に向け、各地の小学校で行われている外国語活動の現状と問題点が見えてきました。話し合いでは、次の3つの内容を中心に多くの教師間交流を行うことができました。参加された中学校の先生からは、小学校の外国語活動に対する感想や要望が出され、中学校とのつながりにおける小学校で行うべき外国語活動の姿が見えてきました。

主な話し合いの内容

- ①英語が得意ではない担任は外国語活動をどのように行えばよいのか。
- ②どのような環境構成や授業内容で外国語活動を行えばよいのか。
- ③道内各地域におけるALTの現状とその活用の仕方とはどのようなになっているのか。

提言1 室蘭市立水元小学校 鹿野智雄先生

室蘭市における外国語活動の現状を、授業の映像を提示してお話ししてくださいました。

室蘭市では教育委員会が中心になり、次の4点を重視した「英語ノート活動案」を作成しました。

- ・市内20校が円滑に学習指導
- ・担任が楽な気持ちで指導
- ・各校が孤立しない体制
- ・ALTを活用した教材の作成

英語が苦手な先生でも取り組める指導案集に関心が集まりました。

提言2 当麻町立当麻小学校 山口貴大先生

人とのかかわりを重視した外国語活動を、授業の映像を交えて、具体的な実践をお話ししてくださいました。

当麻小学校にはALTが勤務しており、そのよさを生かした様々な学習、交流の実際をお話しして下さいました。日常のALTとの交流により、気軽に英語でALTに話しかける姿が見られるそうです。

英語による「福笑い」や修学旅行での外国人との交流等、体験的な外国語学習のあり方に関心が集まりました。

林 英雄 真栄中校長より

- ・小学校の外国語活動は、子どもの身近な所から導入すべきである。1時間ごとに内容を変えるのではなく、同じ単語を繰り返して学ばせることが大切である。
- ・外国語活動での楽しみは、ゲームを楽しむことではない。英語を使うことを楽しめるように内容を工夫すべきである。
- ・中学校は英語教育のノウハウをもっと小学校に伝達すべきである。小中の連携の中でつながりのある外国語学習を行っていくことが大切である。

軽部恭子 指導主事より

- ・小学校の外国語活動はスキル中心ではなく、子どもの「もっとコミュニケーションを図りたい」という意欲を大事にした授業を行うべきである。
- ・様々な教材が出てきているが、教師が教材に使われないようにしたい。授業でのねらいに合わせて教材を使っていきたい。
- ・外国語活動の評価も、他の授業と同じようにそのねらいに応じた評価をしていきたい。観点は目標にある3つの柱である。